

戦時下関連事項

(一) 学徒動員

昭和十年半ばには、国防国家体制が全面に押し出される時勢となる。十五年六月には野外演習と集団勤労作業以外の学校単位の旅行を自制するように求める通達、九月には文部大臣より高等専門諸学校に学校報國団を組織するよう指示があり（本書「諸規則」の項参照）、十六年三月には国民学校令が公布された。十六年十月に大学学部と専門学校の修業年限の短縮が閣議決定され十二月に繰り上げ卒業、翌十七年八月には中学校と高等学校についても四年と二年にそれぞれ修業年限を短縮することが閣議決定された。

東京音楽学校が戦況の激化にもかかわらず引き続き演奏活動を行い、十七年には満州へ建国十周年記念の大会がかりな演奏旅行を行うことができたのは、すべて報國団の名のもとにおいてであった。演奏曲目には制約が加えられたが、戦時中ならではの音楽の需要に応じ戦意高揚のための作曲、演奏、録音、また慰問演奏などが続けられた。

十八年六月には学徒戦時動員体制確立要綱が閣議決定され、十月二日学生生徒の徴兵猶予停止、十月二十一日には明治神宮外苑競技場において文部省主催による関東一円の出陣学徒の壮行会が催され、十二月一日学徒兵入営となった。東京音楽学校も学徒を送り出したが、壮行会当日、本校からは出陣学徒はもとより在校生全員が吹奏楽や合唱で加わった。

戦災を免れた東京音楽学校ではあったが、敷地内に防空壕が作られ、通学路となる上野公園には高射砲隊の陣地が作られ、教室の一部は軍関係者の宿泊を受け入れた。当時は軍が航空機工場の分散疎開のため学校校舎を借用することが行われており、本校の場合もその趣旨に沿ったも

のであった。この件に関して、本校が東部第七八五六部隊と交した文書が残っている。十八年十二月の第一〇一回をもって定期演奏会は中断され、職員生徒の召集や動員や疎開により授業もままならなくなつた。

当時の本校全体の様子を記した記録はなく、職員生徒もそれぞれの立場や役割により知る範囲が限られているため全容を網羅することはとうてい不可能である。したがって本項では学徒動員を含む戦時中を中心に、編集委員会の依頼による書き下ろしや聞き取り調査、また関連資料によって記録の一部とした。

一次資料の乏しい時代のことゆえ、卒業生はじめ軍楽隊関係者など当時を知る人の証言を頼みとするところが多かった。多くの方々に史料や写真の提供、また時間のかかる聞き取り調査などにご協力いただき、また幾人かの方々にはこれからの人々に伝わるようにと当時の記憶を書きとめていただいた。また出陣学徒壮行会に関する文書は学内で見いだすことができず、東京大学史料室のご好意により同室所蔵の原資料を閲覧させていただくことができた。深く感謝申し上げる次第である。

東京音楽学校の思い出

入学から学徒動員そして戦後

岩井直溥（昭和十七年予科入学
昭和二十二年本科卒業）

日時など不確かですが少しずつ思い出しながらお知らせすることにします。

音楽学校入学試験と入学時の面白い話

一、入学実技試験ではあまり知られていないが私はトランペットで試験を受けた。このことは管楽器の同期生はある程度知っていたがほとんどの人は信じてくれなかった。実は実技試験の時、私の前二人（内田富美彌君（故人）と早川博二君）がやたらと

巧く、そのために私のプレイは十六小節位吹いたところで「はい！そこまで」。だがその後しばらくその場に待たされ、持つて来られたのがフレンチ・ホルンとチェロのソロ楽譜で、「ちよつと吹いてごらん」とのご指示。ホルンはほとんど吹いたことのない私が巧く吹けるわけもなくここで諦めの境地。ところが翌朝学科試験の直前、校長室に来るようにとのお達示で何うと、乗杉校長から「君ね、トランペットは巧いのがいるから駄目だよ。ホルンなら入れるけど、どうかね？」とお話。これで決まり！（古き良き時代の素晴らしい話）

二、入学してから分かったことだが、当時の徴兵や召集などで現役、OB（当時は先輩）を含めても学校オーケストラのホルン奏者が少なく、かなりの曲が演奏不能だったこと、また戦況が日ごとに悪く空襲が予想され防火要員としての男子生徒の手が必要だったことが入学の決め手だったようだ。

新入生の頃の話

一、その頃は入学できたからといって安心はできない状況で、「仮入学」という制度があり一学期間は音楽学校生としての適性や品行などがかなり厳しくチェックされ、二学期になり初めて「本入学」が許可されたような次第で、私はスレスレのぶら下がりでやっとパスした。実はその頃の校則に「学校校務以外に男女の会話及び付き合いななど絶対禁止」の条項があったが、それらをかかなり破っていたのが私で、誰かからチクられたり生徒課に日参しての謝罪など若さに任せての行動が多かったが、お情けで本入学ができたようだ。

二、入学当初、大変感動したことは行事のたびごとに歌われた生徒全員の混成コーラスによる国家「君が代」と、出征兵士に捧げる「海行かば」の重厚なサウンド。歌いながらも身震いするほどの感激を味わったことで、このことだけでも音楽学校に入った甲斐があったと思った。（これも時代的背景の影響かな？）

三、私が入った頃は制服、制帽があり、戦時中にも関わらず男子の制服は黒のスーツ（当時は背広）で黒の棒タイ、制帽はなんと黒のソフト帽というしゃれたもの。さらに夏にはパナマ帽もOKとはずいぶん粋な計らいであったが、この服装で四、五人が群れをなして銀座を歩き回った様子はかなり異様なもので、戦時中でもあり交番の巡査にしばしば呼び止められた。当時、上野界限ではこの学生の服装を称して「上野のカラス」だ！と言っていた。この後、制服は時代的な背景によって黒の国民服的なものに変えられたが、ほかに軍事教練用の作業服みたいなものもあった（女生徒の制服についてはたぶん、白のブラウスに黒のスカートで、正装は紺の袴であったように記憶しているが、ほとんどは当時の平服であったように思う）。

当時の学校の様子、および授業内容など

一、オーケストラは「学校オーケストラ」と「生徒オーケストラ」があり内容的にはそれほど変わらないが「学校オケ」は授業で、先生方も多数メンバーに入れ、指揮者はフェルマー先生（ドイツの方）がおもでグルリット先生や信時潔先生、橋本國彦先生、木下保先生などの先生方で行われたが、「生徒オケ」は授業ではなく、いうなればクラブ活動で現役生とOB、OG

が主体の大変活発なオーケストラであった。おもに放課後、週三日ぐらいの練習で指揮者はおもに当時、研究科生だった渡邊曉雄さん（私の遠い親戚）や森正さん、それに聴講生の高田三郎さんなどで演奏会も盛んに行なわれた。また授業の「吹奏楽」の指揮はおもに山本正人さん（聴講生で軍事教練の助手でもあった通称「トロさん」）それに前述の森正さんであった。

二、この頃の学生（生徒）生活で私に大変深い影響を与えたことの一つが橋本國彦先生の「作曲法」であった。これは先生が参考のためによく引用された「ジャズのハーモニー」で、これは絶対禁句の時代であったが、もともとその分野の音楽が好きだった私に強烈な印象を与えてくれた。これが元で休み時間などに仲間を集め内緒で（と言っても音は筒抜け）ジャズのまねごとのような演奏を繰り返していた（憲兵には知られずにすんだ）。なにしろ私の同級生には大石清君（元芸大教授）、早川君、内田君、萩原哲昌君（「スーダラ節」の作曲者）、石津憲一君（歌）など。さらに師範科の増廣卓三君（広島島の吹奏楽のボス）など豪傑が揃っていて当時、生徒課の妹尾先生から「今までに、こんな連中が揃ったのは初めてだ!!」と嘆かれたのである。またこんなこともあった。授業中だったが私は休みの時、ホルンの練習のため校庭で校舎を背に大きな音でトレーニングの最中、二階の窓から水が私の頭にバサッ！と同時に「ウルセー！」のどなり声、ピアノ教授の永井先生で水は防火用水だった。先生方にも豪傑はいたのだ。この頃、同級生の連中と話

が弾むのはもちろん「キャッスル」（学生食堂）で授業サボリの溜り場であった。

三、特殊な授業として「軍事教練」があつたが、これは軍隊の基礎訓練を身に付けさせるもので士官学校出の中佐、大佐クラスの教官が配属されていた。助手をしていたのが山トロさん（山本正人さん）で、音楽ではあまり教えを受けなかったが、この教練ではかなり厳しく鍛えられたものである。夏休みには教練の合同演習が軽井沢の東京都学生寮を宿泊所に三日ほど行われ、音楽学校生の部隊はよくまとまり軍隊の信号ラッパが上手だと評判であつた（音楽専門だからあたり前の話）。また教練では年二回ぐらい、査閲なるものがあり将官クラスの方があらゆる大学の検査に来られるのだが、われわれ音楽学校生の隊列や演習における散開訓練などピカ一の評価（リズム感があるからあたり前）で時には宮様（多分、朝香宮）が査閲官として来られたこともあつた。

四、やっと入学した翌年にはもうアメリカ軍機の空襲が始まり、最初の空襲は校舎の真上を通るコースではつきりと見え、上野公園にあつた高射砲部隊の射撃音が鳴り響いた。このような戦時状況で、オーケストラや吹奏楽の演奏曲目が極端に減つてきたのが学生（生徒）であつた私にも分かつた。

それは「敵性国の音楽はまかりならぬ」とのお達示でアメリカ曲、フランス曲は当然、後にはイタリア曲も演奏禁止の時代で残つたのはドイツ曲、フィンランド曲それに日本曲だけで、私にとってはかなり面白くない部類の曲が多かつた。そのころ

持ち上がったのが学徒動員のお達示。

学徒動員と徴兵

一、この学徒動員が下ったのはたぶん、昭和十八年夏休み直後だったと思うが、私のように一浪して入学した者は即、徴兵検査であった。この頃本来ならば大学生は卒業後の徴兵であったが、この学徒動員法で一変し、「数えて二十歳」以上の学生はすべて動員の対象であり、もちろん音楽学校生が音楽隊に入る制度などはまだできていない頃の話である。

二、われわれの徴兵検査はたぶん昭和十八年十月、入隊は十一月三十日頃であったように思う。この時徴兵検査を受けなかった同級生はたぶん、一年後くらいに短縮授業で卒業した後、一部は戸山学校音楽隊に入隊したのだと思う。

出征学徒の出陣壮行会そして出征

一、十八年十月二十一日この動員法で出征が決まった学生諸君を送る「出陣学徒壮行会」が当時の首相、東條英機陸軍大将や軍部の将官クラスなど多数参列のなか神宮外苑で行われ、都内および近県の出征学徒（全国の学徒代表も参加していたかも知れない）と見送りの男女学生数万人（？）が集まった盛大な壮行会が行われた。この時音楽学校生は吹奏楽や合唱団として参加し、「分列行進曲」や「海行かば」などの演奏で壮行会を盛り上げたが、出征する大石君や私もこの演奏に加わっていた。壮行会の終了後、私たちは神宮外苑から学校まで演奏行進をしながら帰ったのをよく覚えているが、なかなか意気盛んな颯爽とした帰校風景であった。この数日後、たぶん十一月三十日だった

たと思うが、私は東京駅から、入隊する第四師団（東京の部隊）の駐屯地、朝鮮の羅南（現、北朝鮮）に向け出発することになった。当日は東京駅に溢れんばかりの男女学生が見送りに来てくれたが、音楽学校生の合唱「海行かば」に涙ぐむ父兄や学生の姿があった。もちろん出征する私には二度と帰って来られないだろうとの戦死覚悟の出陣であった。このように出征する学徒それぞれがいろいろな想い出や決意を胸に出陣して行ったことに比べれば、「壮行会のイベント」などは歴史上ほんの小さなことのように思える。

入隊そして軍隊生活

一、東京駅から窓を全部遮蔽した列車（スパイ活動盛んな時代で部隊移動は隠密裡に行われた）で博多に着き、ここで初めて軍服姿になり、その後船舶で敵潜水艦の動向に注意しながら朝鮮（今の韓国）の釜山に上陸、その後ふたたび列車で目的地に向かい十二月三日にやっと羅南に到着、驚いたことに町中、氷だらけの零下三十五度。歩くたびにステンと転びながらやっと部隊に到着、これからが私の軍隊生活の始まりである。

二、軍隊生活の一部を。まず私の入隊した部隊の名は現在の北朝鮮で「朝鮮羅南第四師団 第八五〇六部隊 関口隊 石附隊」という長たらしい名前で、訓練については大変厳しく人間の能力をことごとくまで追求するような演習ばかりで、今の皆さんにはとうてい想像もつかないことだと思う。

三、この部隊で約七カ月ぐらいの勤務中、動員学徒兵のための幹部候補生進級試験に合格し一部は中国、南京の予備士官学校に入

校することになったが、私は運よく千葉県習志野へ向かうことになり、この予備士官学校に入校。これがたぶん昭和十九年三月頃の話。場所は当時の「千葉県千葉郡葉園台・東部軍教育隊竹下隊 第四区隊」である。この予備士官学校でも信じられないほどの猛烈な訓練の明け暮れであったが、この頃私は上海事変の時の功績？によって「従軍徽章」なるものをいただいたが、これは十二歳の時の上海事変の際に上海海軍武官府の伝令をしていたことによるものだった。二十年二月卒業と同時に見習士官に任命されたがこの時、同期の見習士官は南京の予備士官学校出の士官を含め樺太、およびフィリピンの部隊に配属されたのだが全員、目的地に到着する前に敵潜水艦の攻撃を受けて戦死した。その数三千名ほどの有望な士官であった。

四、見習士官に任命されたのを期に私は現役を志願した。現役志願とは終生、国のために軍人としての勤めを果たすことであり、いわば職業軍人になることであつたが、どういうわけか私は予備士官学校を卒業と同時に暗号の習得を命じられ、ふたたび厳しい訓練の毎日に入入した（私がこのような激しく厳しい訓練を平気で耐えられたのも家が軍人家系だったせいかも知れない）。この暗号教育終了後しばらくして私は陸軍少尉に任命された。

五、この頃、私は中野学校（スパイ養成学校）の要員や音楽隊へ行く話などいろいろ候補になっていたようだが、戦況の緊迫によって結局、私は新しい暗号の乱数表を持ってフィリピンに飛ぶことになった。しかしこの時、フィリピンの部隊が壊滅あ

るいは全滅し私の任務は不可能になり、結局は房総半島先端に配置された新しい混成旅団に配属が決まり着任したのが当時、館山の近くにあつた「那古船形」というところの小学校に駐屯していた部隊、千葉県安房郡国府村の幡一四二二四部隊小池隊で、任務は部隊本部、暗号班長兼訓練班長で部下四百人の命を預かる重責であつた。この部隊は敵の本土上陸に備える戦闘部隊であつたが、この房総半島は当時アメリカ空軍機による東京空襲の飛行コースで、私たちの部隊は連日この米軍機との戦闘に明け暮れていた。しかし暗号班長でもあつた私の所に突如入ってきたのが「日本ポツダム条約受諾」というショッキングな情報であつた。これから十日ほど後にあの歴史的に重大な「天皇陛下の終戦の詔勅」があり、私たちにとっては溢れる涙を拭うこともできない屈辱の敗戦であつた。

終戦後の復員そして復学

一、終戦後の部隊では言いつくせない程大変な問題も数多くあつたが、私は運よく千葉県で終戦を迎えたために二十年八月二十九日頃に復員することができた。復員先は空襲で家を焼かれた姉の疎開先の軽井沢だった（私の家はこの時まだ上海で、おふくろや兄貴は三年後の引揚げ者）。この後九月頃にまだ軍服姿のまま学校に行き、復員の報告と復学の申請をしたと思う。

二、この後十月頃には学校に戻り本科二年に編入されたが、同級生は全員初対面で出征前のクラスメートにはほとんど会わなかつた（みんな戦後の生活は苦しかったのだ）。このような状況では学校生活もあまり面白くなく、その上私に軍隊生活が染みつ

いていたためか何事も甘く感じられていたので、この時の同級生には馴染みが薄く、当然授業もサボりがちであった。

三、この頃家族の揃っていない私にとっては生活費を稼ぐ必要があり、そのため考え抜いた末、選んだのが以前吹いていたトランペットで何の気兼ねもなく演奏できるようになった好きなジャズをやろうと決心（この頃、クラシックの仕事は古株のプレイヤーばかり、ましてやホルンでは仕事が無であった）。そして仲間の太石君、早川君、藤田、萩原君（いずれも同級生）や大先輩の山本力さん達に相談したところみんな同じ思いで、さっそく結成したのが「ニュー・フェロー楽団」で、この終戦の年の十二月にはもう米軍専用のクラブ「A-ワン」で仕事をすることになった。つい数カ月前までは敵国であった連中のクラブで仕事とは、われながら変わり身の速さには驚いたものだった。

四、翌二十一年の四月からは学校の授業なども通常の状態に戻ったように思っているが、この時から私の生活は昼間、学校の授業（あまり出席していない）とオーケストラや吹奏楽でホルンの演奏、そして「キャッスル」のおばさんに作ってもらった夕食を食べ、夜はクラブや米軍のキャンプでトランペットのジャズ演奏となかなか忙しかったが、充実した日々であった。

五、この頃アメリカGHQの宣伝活動の一環だと思うが、第一騎兵師団の軍属？としてアメリカで大変有名なフル・バンド「ラルフ・フランガン楽団」が、あのクラシックしか演奏できなかった学校の奏楽堂で演奏会を催した。私はこの楽団の「奏楽堂の

窓ガラス」を震わせるような輝くサウンドを聴いて身の毛がよだつような興奮を覚え、外国にはこんな素晴らしいサウンドがあったのかと、いつまでも印象深く私の耳に残った。

六、昭和二十一年秋、出征前には全くなかった「第一回芸術祭」があり、出店や催し物など大変賑やかで、私たちのグループが奏楽堂でジャズ風の曲を演奏した。この時のメンバーが信じられないほどの凄さであったので、記憶に残っている人たちだけを抜粋して記しておきます。

メンバー表

[Saxophone と Clarinet]

Clの喜田 賦さん

Clの大橋幸夫さん

Clの萩原哲昌さん

Clの藤田さん

Obの山本 力さん

Obの鈴木清三さん（不明確）

[Trumpet]

Tpの内田さん（不明確）

Tpの早川博二さん

Tpの私

Tpの金石さん（不明確）

[Trombone]

Tbの山本正人（トロ）さん

Tbの大石 清さん

Tbの戸田さん

Tbの河邊浩市さん（不明確）

[Piano]

歌の萩谷 納さん

Pianoの園田さん 作曲の塚原さん

[Accordeon]

[Banjo]

Violinの江藤さん

Hnの千葉 馨さん

（平成十二年三月）

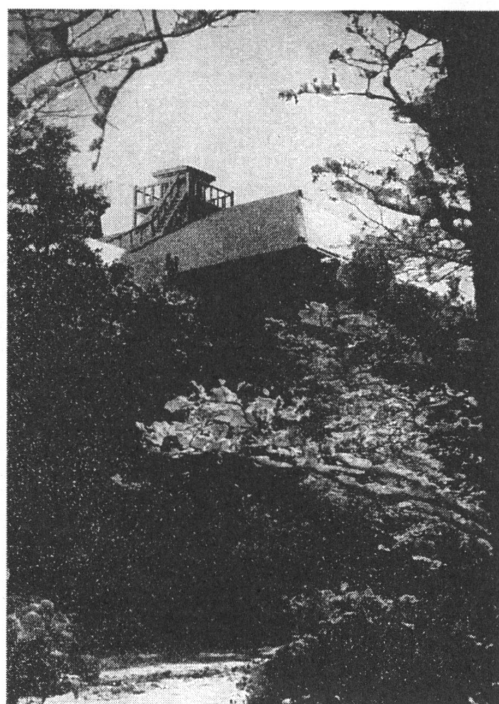
昭和十七、八年頃の思い出

大石 清（昭和十七年予科入学
昭和二十二年本科卒業）

昭和十七年四月の一日、東京音楽学校の入学式が行われ、この年は男子二十五名、女子三十五名、六十名の入学でした。試験は実技、コールユブゲン、聴音、学科などでありがたいことにピアノの試験はありませんでしたので助かりました。実技といっても、私はユーフォニアムで受験したのですが、まともな曲などなかったので適当な一曲をサラッと吹いておしまい。一緒に受けた連中も同じような状態で、びっくりするような名演奏をするものはいませんでした。聴音も奏楽堂に座っていてステージの真ん中で黒澤愛子先生の弾くピアノの音を書くのであり、回りを見ればすぐ見えてしまう。これはしめたとばかり前の女性の肩越しにじっくり拝見して、自分の書いたのとくらべ同じだったので一安心、のんきなもの。コールユブゲンなどは、試験をしている部屋から聞こえてくるし、呼び出し係の上級生がこの曲だと教えてくれるので試験の順番までにしつかりさらって試験場へ、みごとに歌え大助かり。学科も国語だけで英語はなく、全体としては簡単なもの、後は面接だけで結果としては形式的だったのではないかと思われるくらい。発表は専門、ソルフェージュ科目、学科と三回もありましたが引つかかったのは声楽、ピアノ、弦楽器で数名くらい管楽器は一名のみ、残ったわれわれはあんな程度で合格するのか、と不思議に思っていました。でも、入学式の時に校長のあいさつで「今年は防空要員として男を多く取った、しっかりと勉強して本入学に受かるようにせよ」ということでわれわれの合格した理由が分かりました。でも一応は合

格したのだからよしとして、どんな状態でも合格には変わりはない、大いに勉強して防空要員に入ったなどと言わせないようにしようとして頑張りました。しかし、管楽器の専門で入学したのに、専門の先生がいないので自分たちで勉強するしかなく、特に私などは先輩もいなかったし、もちろん専門の先生もいないし、楽器も満足なものがない、加えて教則本も楽譜もないというないないづくし。そのうちにトロンボーンも吹けというしコントラバスも弾けという。専門のチューバは二の次となってしまう、それが後々に役に立つとはその時には考えもありませんでした。

通学の際、上野駅から学校の方へ歩いて行くと、現在の噴水のあるところが小高い台地になっていて、陸軍の高射砲と聴音機がおいであるという話でした。高い塀で囲まれていたので中の様子は分からなかったし、作動することはないと思っていましたから、気にもしないで塀の外を歩いて学校へ通っていました。そのころの戦争はアジア地区で連戦連勝ということで、内地では戦争などは考えられない状態で、昭和十七年四月の中旬に東京に初めてアメリカのB17が来襲した時にはびっくりさせられました。ちょうど、狭い校庭で野球のような遊びをしていた時で、見たことのない飛行機が学校の上を飛んで行ったのですが、その直後に上野の高射砲があわてたように発射しましたが、飛んで行く後ろを撃っているのだから当たるわけではない。あまりにも突然のことであつたため、警報もならず飛び去ってからサイレンが鳴ったように記憶しています。後にも先にも高射砲の存在を知ったのはその時だけでした。私たちが昭和十八年に軍隊へ入ってからはその部隊の兵隊たちが学校の校舎の一部



昭和17年頃の奏楽堂。屋上に見張り台があった

を兵舎代わりに使っていたとのこと。奏楽堂の屋上にも見張り台が作られ、残っていた何人かの生徒たちが交替で見張りをしていたという話は戦後になって聞きました。奏楽堂のあった校舎の前に立派なソテツがあったし、玄関の左には八重桜があって、毎年春には美しいすばらしい花を咲かせ、われわれの心に安らぎを与えてくれたことはいまだに印象に残っています。奏楽堂を取り壊した際に切られてしまい、ただ、思い出の中に残るのみです。上野の山は空襲の標的にはならなかったようでほとんど無傷で、わずかに動物園の入り口付近や旧都立美術館の裏辺りに間違っただけ落ちたと思われる爆弾の跡があり、よく学校の方に落ちなかったと後でホッとしました。今になって思い起こすことですが、あの戦争の最中に音楽学校に入學し音楽家を志し、もろもろの困難の中で勉強したことが、現在の力となってそれぞれの立場で活躍できているということは大きな幸

せだと思っています。

(平成十一年四月)

防空壕と昭和二十年入学の頃

平井哲三郎(昭和二十年入学
昭和二十三年卒業)

〔校内の防空壕について、編集委員会よりの照会に応じて書かれたもの〕

防空壕の位置ははつきり覚えていませんが、寛永寺側にあった雨天体操場の前あたりだったような気がします。

右側に入口があり、ななめになった扉を開くと下に降りる階段がありました。十段もなかったような気がします。

横から見ると盛り土になっていて、下に降りるとやっと頭がつかえるような高さで、たしか両側に座る場所があったような気がします。

この防空壕は原則として男子は入れず。

ただ一度だけ級担任の眞篠将先生——終戦後は永いこと文部省の教科書調査官をしていらつしやうと記憶しております——が御真影の掛りだったので演習の時お供したような気がします。

防空壕に関する件は以上です。

ついでに当時の記憶を少し書いておきます。

昭和二十年になって上級生と同級の女子の方が動員で外に出られ、私も一年の男子だけ数名が学校に残りました。

当番で夜学校での当直があり畳の部屋に泊っていました。

朝食は持って来たお米を持って寄宿舎でいただきました。

友人の一人がこっそりお酒を持ち込んで来てくれて、皆酔っぱら

つて本物の空襲警報が鳴っても誰も起きず、私一人が「皆待機しております」と報告に行くことで難をのがれたことを覚えております。

学校には、普通なら遠慮する上級生もいません。近くに遊びに行くところもありません。誰もいない学校で一日中思いきりピアノが弾けて大変幸せな日々でした。

いよいよ学校に軍隊が入ることになり、川口の薬品工場に行く動員命令が下り、「いやだなあ!」と思っておりましたが、「翌日は電休日(当時の電力事情により、月に一度、大量の電気を消費する工場などでは電気の供給が止められていた。八月十五日は電休日に当たっていた)なので翌後日から出勤せよ」と言うので家にいたら、それが八月十五日の終戦だったのです。

(平成十一年八月)

四年制師範科第一回生として

坂田壽美(眞理子) (昭和十七年師範科入学)
(昭和二十年卒業)

私は東京音楽学校に四年制の師範科の第一回生として昭和十七年四月七日に入学いたしました。希望校に入学できた嬉しさで、全授業に頑張ったことを今でも覚えています。特に印象深かったのは、合唱の授業がパイオルガンのある奏楽堂であったことです。

二年になって秋頃、体操の授業がリトミックから教練に変わり、その頃から学校の生活にも戦時色が濃くなってきました。学生食堂のキャッスルも、二年生の終わりには閉まりました。上野公園の噴水のあたりは、高射砲隊の陣地があり、高い塀がめぐらされていて

て、歩行者は細い通路を歩くようになり、入学当時と景色が変わってしまいました。

十九年に入ると疎開する人も増え、学校の個人レッスンも、先生がいらっしゃらず行われなくなる人もいました。

幸いにも先生も私も東京でしたので、私は先生のお宅へ伺い、卒業時まで福井直俊先生のレッスンを受けることができました。

戦争中、授業のない時は奏楽堂の見張り台(門から見える一番高い所)に教務主任もなさっていらした警先生と二人で見張りをし、敵機が見えると手で合図し、下の人に知らせました。私はクラス委員の一人でしたので、これも役目でした。警先生のご都合の悪い時はドイツ語の妹尾先生でした(授業がまだ少しあったので欠講の時だけ見張り台に上がりました)。授業のできなくなった三年生の途中から月島の工場(ソニーの前身)へ通い、音波探知器の仕事をしました。金属の細いうすい板に、見本の音と同じ音の出る位置にするしをつける仕事です。私たちのつけたしるしを金具にはさみ、機械にとりつけると一サイクルも違わず一秒位でできました。私たち音校生が行くまでは、機械にとりつけると幅広く画面にひろがり、ゆれにゆれ、少しずつずらすことによって何分もかかったのに、音校生の耳はすごいと工場の人に言われました。一秒で成果があたり、あつというまに、山のようにできあがり感謝されました。

二十年三月十五日の空襲以来、東京の空襲も激しくなり、動員先も諏訪に変わりました。勝つことを信じて「今日から勝つために頑張ります」と大声で宣誓したのを覚えています。諏訪でちょうど一週間たった八月十五日、天皇の玉音放送があり終戦になりました。

戦争中は危険と紙一重で命拾いするような経験もいく度かしました。

大学へ戻っても先生不在の状況、授業もできないので、卒業式の日取りが決まったら知らせるから、それまで地方の人は郷里に帰って待機するよう指示があり、皆と別れてしまいました。私は東京でしたが、当時は卒業して一年半は御礼奉公する義務があり、第一志望を東京、第二志望を親戚のいる札幌にしました。けれど東京は長年就職口がないと聞いていたので、札幌に行くつもりで、伯母の家に挨拶のため訪ねることにしたのです。札幌にいた時に東京から卒業式の知らせと総代に決まったとの連絡を受けました。当時、青函連絡船はアメリカ兵に占拠され、封鎖されていて日本人は看護婦でないかぎり乗ることはできませんでした。それで卒業式の出席を諦め、当日は式の時間に合わせて晴れた札幌神社へ一人さびしくお参りに行きました。

十月になって日本人も青函連絡船に乗れるようになり、やっと家に戻りました。昔のことで東京まで十四時間もかかったのです。

就職先は東京都立城南高女（第十七）。まさか東京で就職できるとは大きな驚きと喜びでした。帰京が遅れたので翌日すぐ学校へ伺いましたら、第十七高女はまだ校舎が建たず第八と同居とのこと。校長先生が音楽の授業がなかったのですぐして下さいといきなり音楽室へ案内されました。行ってびっくり。そこには第八の生徒がいたのです。教科書もノートもない中で、黒板に楽譜を書き、歌を教えました。生徒のくい入るような姿は今も忘れません。そうして二校（後の城南と八潮）の教壇に立ち、昼二十時間、夜学五時間を休

むことなく元気に務め、私の音楽指導の生活が始まったのです。

戦後の混乱の中で、同居していた学校は一枚にまとめられ校名も八潮高校と変わりました。合唱指導をつづける中、昭和二十七年にNHK第一回合唱コンクールに参加し、幸せなことに優勝することができました。以後五回の優勝を果たしたあと、新設校の玉川高校へ移りました。それまでの合唱指導が認められてか、東京芸大より昭和三十六年に合唱とソルフェージュの指導をするよう辞令をいただき、平成二年まで（二十九年間）講師として務めさせていただきました。朝から夜まで好きな音楽指導に務めることができ、ストレスもたまず、健康でいられたことに感謝し、幸せに思うこの頃です。

（平成十一年十月）

昭和十六年三月以降二十年頃までの記憶

須賀靖和

〔昭和六十年頃寄せられた「須賀メモ」と題するノートより。二十五頁におよぶ記録のうち、公文書などの資料によって明らかにされない内容のみ掲載〕

この記は約四十年も以前の思い出であり、声楽科を中心に見たものである。

学校の行事、スタッフ、カリキュラムを思いつくまま列挙した。規律 まことに厳格であり、先生、生徒の礼節は最高であり、上級生、下級生のケジメも立派であった。

男女生徒の対話も今日考えられない厳しさで、生徒指導主事立ち合いで、一メートル離れての対話が義務づけられ、学校食堂、

キャッスル、当時約二十坪位の雑物（調理室を含む）を二等分し、別々に着席して整然と食事を行い、他は男生徒、女生徒控室で食事をする。または女子寮生は寮で食事をする。外部の食堂も利用していた者もいた。

夏休み 服装 男子は黒背広、黒ネクタイ、黒ソフト、黒靴、夏は白ズボン、パナマ帽またはカンカン帽であった。女子はワンピース、白エリの基準服か、メイセン程度の質素な和服とハカマ紺色？

その後は男生徒は黒の国民服に、女子はモンペに移行する。

夏休中に勤労働員あり、校庭の隅に大きい防空壕を作る。非常持出し品と女子学生の待避場となる。

七月の初めに魔の本入（本入学のこと）の発表があった。昭和十六年入学本科生は六十名全員合格。再会を期して九月に進む。

開戦へ 戦運急をつけ次第に戦時色が濃くなる。コクガクノソウセイという文字が次第に輪を拡げ、先輩の作曲された曲がクラスの合唱に多くをしめるようになる。

定期演奏 この年はハイドンの四季であった。指揮ヘルムート・フェルマー氏。独唱 ソプラノの先輩の急病で、アルトの先生のリヤ・フォン ヘッサート女史が代る。アルトでソプラノが歌えるという驚きを感じたものである。

第九演奏 暮もせまった寒い日、奏楽堂でベートーヴェンのNo.9が演奏され、鳥肌の立つ感激を感じた。

昭和十六年十二月八日 開戦。この日は、男子生徒は軍事教練の査閲があり、賀陽宮恒憲王陸軍中将が査閲官として来校された。

昭和十七年 春、入学式が終り緊張の中にもどかな桜の季節とな

る。

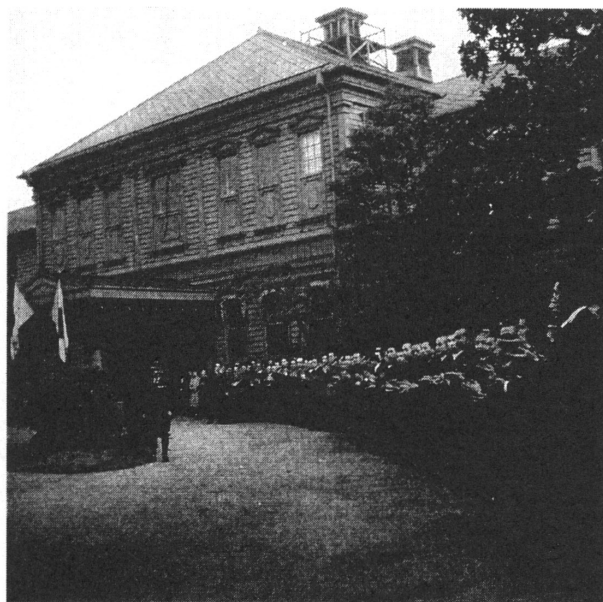
奏楽堂で録音をとり、宮様の御台臨があると張り切ってコーラスの練習に入る。下總先生の作品であったと思うが、B25ノースアメリカンの急襲で中止。男子生徒は本校と分教場の警備にく。学校もこの時より警備態勢を作っていた。

六月 関西へ演奏旅行。

夏休みへ 八月―九月 満州国へ 七月十日以降練習、八月上旬旧

満州国建設十周年記念として内閣より依託をうけ、教職員学生約百五十名の編成で満州国に出張。

大連、旅順、新京、ハルピン、奉天、平壤、京城と約一カ月の旅。九月一日帰朝の予定が台風のため二日遅れて帰京。



昭和17年頃

北陸旅行 十月 読売新聞主催で報国演奏会。十月、約二週間は授業はなくなった。新潟、富山、高岡、金沢、長野、前橋。

十一月 やつと平常の授業態勢に戻るが、学生の中には赤紙召集が始まり、出征する生徒も増えてきた。

十二月 防空態勢の強化。

奏楽堂が音楽学校の象徴であるが、防火用水槽、火たたき、バケツ、さらに燈火を防ぐための暗幕もつけられ、ガラス戸には☒の紙もはりめぐらされ、文化の香りも一時うすらぎ、奏楽堂のベンチレータの周囲にも監視台が設置され始めた。

昭和十八年 正月、敗戦への方向がひしひしと感ぜられ、空襲警報も度数が増えてきた。

連合艦隊司令長官の戦死の報も知らされ、暗い日々が続く。

この間、ささやかな学内演奏は土曜演奏といわれ、音楽に飢えた聴衆もよく集つてくれた。この頃は学友会演奏会ではなく報国団演奏会と名称は移る。

三〜四月 学生の個人レッスンよりも集団の勤労作業の方が多くなり、小田急線砧駅付近の農園への作業にも時々行くことが多かった。

戦死された山本連合艦隊司令長官を悼む音楽会が日比谷で行われたり、長岡の生家へ弔問演奏にも出かけた。

兵隊になつて学校を離れていたので、三月〜十月はわかりません。

十月 学徒出陣。数多くの級友はいさぎよく出征。雨のそばふる神宮競技場で別れをつげた。

男生徒の残留者は軍属として暁部隊の聴覚担当を負わされ、女生徒は海軍の艦政本部および沼津の海軍対潜聴音器工廠に奉仕し、残った者は赤羽の被服廠その他軍関係の工場に出向き、形の上での授業はあい間あい間で行われるも、空襲で中止となることも多く、実際は、さびしい日々であったが、戦争の最中、報国、愛国の精神が活力を与えていた感がする。

男子学生控室には、航空隊予備学生のポスターがはられ、また、陸軍音楽隊への誘いもあり、多くの学友も三三五五自らの道を選んでいった。

学内の金属、スチム、ストーブの類は供出となり、暖房器はいつさい無になり、配給分の炭だけとなる。

昭和十九年 いよいよ決戦の時が身近にせまり、上野公園は高射砲陣地が本格化し一般人の立入りも禁止となり、音楽学校にも防衛のための兵隊さんが数多く駐屯し始め、欲しがりません勝つまではとか、ぜいたくは敵だとか、短波放送は絶対聞くなとか、思想面についてのきびしい探索があったようである。

九月 昭和十六年入学生は半年繰り上げの卒業となり、実際の力はやつと三年修了程度ではなからうかとも思えるが、とにかく卒業となる。

この頃は卒業生の中から無給嘱託の形で防空要員に採用され、主として奏楽堂と運命を共にする者も出た。私もその一人である。

十月 卒業演奏はもはやなく、在校生も勤労奉仕にあけくれた。奨学金と学生 当時は成績のよい者から授与されるのが普通で、財

力の貧しい者にも給与されていたが、本科学生の中からの申込み者が少く、教務主任でいられた警書夫先生は、めぼしい学生にぜひもらうてくれとおっしゃったが、ほとんど不思議に辞退していた。何かひもがつくのがいやなのか、金持ちでもなくくせに無理な自尊心が傷つけられるのかよく判らないが、面白いこともあった。

当時の通價 一銭 五銭 十銭 五十銭 (硬貨)

一円 五円 十円 二十円 百円 (紙幣)

を今日の物価と比較すると物により倍数は異なるが

うどん 三〜五銭 今は百五十円〜二百円

散髪 二十五〜三十銭 〃 二千七百円〜安いところもある

はがき 一・五銭 〃 四十円

運賃 五銭区間 例、池袋―田端 今は百四十円

二千五百倍から四千倍となっているのを参考にすると、学生がどのような苦労し生活をし、学生の気質をもっていたかが推察される。

学生の気質 とにかく質素を旨とし、軽佻浮薄は自重して、報国の一語が全体を支配していた。

男女学生の節度はもちろん、師弟、上下級生の礼節は厳しく、また奉仕というたぐいは手弁当で無報酬、交通費もなくそれが当然と考え、車馬代が出たり食事代をもらうなどはとまどいと、恐縮のきわみと行って行動した。

多少の不満はあっても、我慢は美德であり教養のあかしと信じているという気質であった。

しかし制約の多い厳しさの中に見出す自由こそは生き甲斐であったのか、学生は活きいきとしていた。

食生活 外食券と学生 米持参依託食堂(学校外、ココナッツという店)。キャッスルでは正直、規模の面収容しきれないので、校外の食堂に向きそれぞれの顔で食事をしていた。

教官殿はさすが、その当時としてもめつたに食べられないようなぎ屋に向かれて、学生の立場からうらやましいと思ったこともあった。

美術の学生がよく通っていた店「愛玉子^{オレキョウチ}」に行く者もあり、うどんや雑炊や、美術館の食堂や科学博物館食堂に行くものもあったが、雑炊食堂をのぞいて昭和十八年中頃にはほとんど営業はできなくなっていた。

いろんな代用食を各自が作るが生活の美学がここにある。食生活は別に音楽学校だけの問題ではないが、学生食堂キャッスルも代用食を考え出すようになり、ソテツの実を粉にしたパンもどきのものを出し空腹のたしにした。学生をあずかる学生食堂の愛情? 努力? 実にうるわしい限りである。

外食券食堂は外部にあり、それを求める生徒もいた。

雑炊店 外食券なしの雑炊店で水増しをして食分をふやす者もいた。飯合を持参して学友のために購入した者もいた。美術館の食堂や科学博物館の食堂で飢をしのいだ者、動物園の象の広場でほし柿を求めた智慧者もいた。ほし柿は象の餌である。

うぐいすだんご 今日も繁盛しているが、昭和十七年いっぱいぐらいまでは何とか営業していて、腹のたしにしていた。

情報は主として食糧の問題。ぜにかねとか食い物は芸術には関係があまりないはずなものが、とことんにおち込むとやはり空腹には勝てないという哲学を思いこまされた？

放課後、松戸周辺、練馬の奥、所沢の農家に衣料交換物資をもつて、野菜、いものたぐいを求める者もいたし、自由販売のタドンを買い出す芸術家の卵の姿もちらほらうかがえた。

学習実態 楽譜は音楽学校図書館、当時赤レンガの倉庫であり、当時としては楽譜、図書、レコード、資料としての文献は全国一（ただし芸術関係として）といわれていた。楽器を含む学生の借り出しも厳しく、原則三日特別一週間、教官はたしか一カ月間であったと思う。

全校合唱はパートスコアで貸し出し、自分の歌で他の声部やオケの編成上の動きを学ぶ様式であった。

一般にまとまった楽譜もなかったこともあるが、クラスの合唱は在倉(庫)の楽譜の中から選んで学んだ。

昭和十六年頃より、ハイドンの四季が学生負担により複製？のものを買って学んだ。即金支払いの者、分割支払いのもの、図書館は難儀していたようである。

管理者は海軍出身の小林安八氏。ものすごく厳しくこわい先生として、取締りや規律には効果があつたように思う。

海道東征も一部貸し出しであったが個人で求めることもでき、この頃から受益者負担のしつけが出てきたようである。

全校合唱時は小林氏が一人一人客席より出席をとり、代返やエスケープは一人もいなかった。体調の悪い者は客席で楽譜を見な

から勉強していた（今日とはえらい差がある）。

その頃はコピーマシンがないので写譜は自らが行い、アルバイトとして校友が書いてくれるものもあつた。

ほとんど放課後は専門の練習。後は写譜に時間をかけ、特に移調するものは難儀のものであつた。

レコードはごく限られた種類のもので購入費もかさむ。友人の家で聴くか学友会主催のレコード鑑賞が週一回。昼休みに一一五号室という部屋で、解説付かガリ版のチラシをたよりに食いつくように聴いた。

テレビも民放もパチンコもない時代で、洋楽の放送はラヂオ第一（NHK）で行われ、比較的よい時間に聴けた。流行歌、ジャズは時局柄ほとんど放送はなく、邦楽と洋楽が中心であつた。十七〜十八〜十九年と次第に軍国調となり軍歌が多くなつたが、国民歌謡という中間的な音楽はまだまだ生きていた。

幼稚か素朴かは別として、限られた資料環境に堪えて戦前戦中の学生は学んでいた。

明治六十〜七十年頃の洋楽の水準はこれか！

音楽学校の戦時中の貢献のいろいろ 昭和十六年当時すでに海軍軍楽隊の依託生が週二回、海軍仕立てのバスで二十人〜三十人？来て、それなりに音楽の技術を研修していた。

学校長乗杉嘉壽氏は辣腕家で、対文部省、対軍部に力をみせ（将官、中将待遇と思われる榮譽礼は二度吹奏を受けていた）、

校長の発言は絶対という当時のしきたりに、ある者の中には反感をいだく者もいたようだが、厳しい時代には校長の腕が学校を救

つたともいえる。

校舎は木造ながら整然とし、手入れも行きとどいていた。当時の専門学校の外人雇傭は普通三名とうかがっていたが、帝大の規模で十名もおられた。

昭和十六〜二十年までの東京音楽学校の意味 文化を担う芸術の専門校として社会の眼はきびしく、また暖かかった。

東京音楽学校は世界大戦にエスカレートしつつあった軍国調の世界の中であるいは無用の長物として見られる面もあり、また軍に協力できる聴覚を提供し、新しい戦力の華として重宝されていたことも事実であった。

学校も学生も自重自治、質実剛健の気風をもち、前述のごとく男子の服装も頭髪も当時流行のモダンなものでなく、黒色、草色国民服、ゲートル、戦闘帽と丸坊主という外観をととのえ、女子学生も和服も質素なもので、はかまはいつしかモンペ姿になり、電髪もごく普通の女子髪型の姿勢に代り、防空頭巾のかぶれるものであった。

取り扱う声楽の選曲の中には、日本歌曲が自然取り入れられるようになった。

対外的な演奏としては、軍楽隊に呼応し勇壯なるブラスバンドが街頭演奏をしばしば行い、士気を鼓舞することも当時としては当然と思うようになり、音感訓練を転用して水中聴音機の指導員に徴用されるようになり、戦車車輪およびシャフトの打検に寄与することも大いなる期待を持たれるようになった。

昭和十八〜十九年 前述のごとく戦時色濃い間、航空隊士官候補生

志願を申し出る者、軍楽隊員に特技を生かす活路を求める者もいたし、女子学生は海軍艦政本部の要員として雄々しくも参加していた。

このような実践こそ音楽学校の立場であり、厳しい社会の眼も次第に暖かさを増してゆき、存立の危機はなくなっていた。

残余の学生もこの頃は軍事教練に参加し、女子生徒も銃を扱ひ、木銃剣術を実習していた。

昭和十九〜二十年 学友会は報国隊と改称。

男子残留学生を三分の一に分け、

一日目八時より 五時まで 一班

二日目八時 〃 二班

三日目八時 〃 三班

とし臨戦態勢で行動し、万一空襲があれば一、二、三班は急遽一本となり、解除の場合は一、二、三班の約束の時日に戻して勤務した。

警戒警報は授業を中止し避難態勢に入る。女子生徒は防空壕へ、非常持ち出し物も同様。男子生徒はそれぞれの部所につく。

空襲警報の場合は、男子生徒は奏楽堂の大屋根、各廊下に待機する。夜間の場合は学校の近くの者は非常勤務を行う。

この頃より無給嘱託という手段がとられ、研究生の中より宿直を命ぜられ夜間いっぱい配置にしていた。もちろん灯火はなく、渡り廊下は夜光塗料の印が付せられていたが、全くの暗がりであった。

無事な時の宿直はまたたのしいこともあり、明日果てるかもし

れない若い先生方とのお話しを承ることも大きい学びとなり、有意義な人生を送ることもできた。

この他は警備の兵隊諸君がいろいろと協力してくれ、校舎は日一日とよばれるが、やむを得ないこととし、ピアノを弾いて無量をなぐさめ、暗やみの中で歌を唱うこともあった。この時の演奏は悲壮感を伴っていたが、ある種のさとりともあきらめともつかぬもので、今日思う時、最も崇高な演奏をしたようにも思え懐かしい。宿直の全員が暗闇の中で感涙にむせんでいたかもしれない。

純粹だったと思う。

出陣学徒壮行会の日

萩原和子（昭和十七年入学、二十年九月卒業、二十二年九月研究科修了）

当時、自宅は神宮外苑に近い青山にありました。

昭和十八年十月二十一日は一日中雨の降る寒い日でした。現地集合だったと思います。私たち女生徒は当時規準服とっていた濃紺に白襟のついたワンピース姿で、スタンドに合唱隊として参加しました。私のようなピアノ専攻生も含め、在校生全員だったと思います。男生徒も、出陣学徒および吹奏に加わった生徒を除く全員が合唱で参加していました。

スタンドに「東京音楽学校生徒席」が用意されていました。スタンド正面の上の方の屋根のあるところに東條首相がおられ、私たちはその下の方、つまりグラウンドに近いところにいたと思います。そこで「海ゆかば」や「君が代」を歌いました。斉唱するので学年別

に並びました。すぐ近くを大学生、専門学校生がそれぞれの制服にゲートルを巻き銃を担いで行進していましたが、折からの雨でゲートルが泥水で汚れ、ほどけた布端を引きずり、振り回しながら行進していく姿がいかにも悲壮な感じでした。

当時は学徒出陣のための演奏会や催しがいろいろありましたが、この壮行会の日だけは、冷え冷えとした雨とともに今でも痛いように思い出されます。

（平成十一年八月）

以下は、学徒出陣に関連する資料と記事である。

昭和十八年十月二十一日

明治神宮外苑競技場

出陣学徒壮行會要綱

文 部 省

學校報國團本部

出陣学徒壮行會要綱

一、目的

大東亞戰爭決戦ニ當リ近ク入隊スベキ學徒ノ盡忠ノ至誠ヲ傾ケ其ノ決意ヲ昂揚スルト共ニ武運長久ヲ祈願スルタメ「出陣学徒壮行會」ヲ舉行シ、其ノ行ヲ壮ナラシメントス。

二、主催

文部省 學校報國團本部

三、實施日時

昭和十八年十月二十一日

1 集合完了 八時三十分

2 分列開始 八時五十分

3 開式 十時

四、會場

明治神宮外苑競技場

五、參加範圍

1 東京都、神奈川県、埼玉縣、千葉縣所在ノ男子官公私立大學、高等、專門學校、師範學校學徒ニシテ本年度徴兵検査ヲ受クベキ者、

2 右學校學徒ニシテ本年度徴兵検査ヲ受ケザル者ノ中代表者、

3 東京都内女子高等師範學校、女子專門學校、師範學校女子部學徒中代表者、

六、服裝

1 出陣學徒（本年度徴兵検査ヲ受クベキ學徒）

制服ニ脚絆ヲ穿テ制帽ヲ用ヒ執銃帶劍（右方ニ彈藥入一個）

トシ、水筒及晝食ヲ必ず携行スルコト、但シ銃器ノ數量不足

スル學校ニ在リテハ木銃ヲ携行、又ハ徒手ニテモ可

2 參列學徒（前項以外ノ學徒）

男子ハ制服ニ脚絆ヲ穿テ制帽ヲ用フルコト

女子ハ制服ヲ着用スルコト

水筒及晝食ヲ携行スルコト

七、標識

1 學校職員及學生生徒ノ小隊長、中隊長ハ男女共左腕ニ左記腕

章ヲ附スルコト（各學校ニ於テ準備スルモノトス）但シ既ニ調製シタルモノニ付テハ新調スルヲ要セザルコト

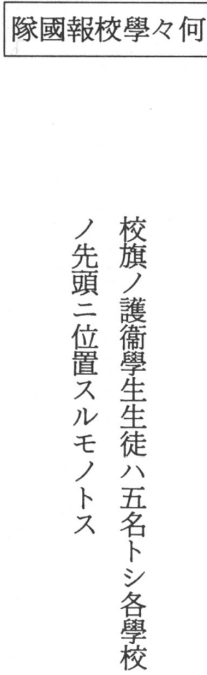
備考

何報何	地質	適宜トス	字體	楷書
何報何	地色	白	字色	黒

2 大隊長以下ノ腕章ハ各學校ニ於テ準備スルモノトス

大隊長
中隊長以下之二準ズ

3 各學校ハ校旗及左ノ標識旗ヲ持參スルコト（各學校ニ於テ準備スルモノトス）



八、隊ノ編成

男子大學、高等專門學校、師範學校ニ在リテハ身幹順序ニ五十名ヲ以テ一小隊トシ四小隊ヲ以テ一中隊、四中隊ヲ以テ一大隊トス、編成ノ細部ハ附表第□號ノ如シ

（參列學徒ノ編成ニ在リテハ各學校報國隊編成ニヨル）

九、集合

1 出陣學徒部隊ハ附圖第一號ニヨリ八時マデニ集合シ八時三十

分マデニ集合體形第一號及第二號ニ基キ編成ヲ完了スルモノトス

2 東京音樂學校報國隊ノ吹奏樂隊ハ八時三十分迄ニ會場所定ノ位置ニ着クモノトス

3 參列學徒ハ八時マデニ附圖第二號ニヨリ所定ノ場所ニ集合ヲ完了スルモノトス

一〇、分列

出陣學徒部隊ハ第一部隊ヨリ八時五十分總指揮者ノ指揮ニヨリ競技場北側入口(時計臺下)ヨリ行進ヲ開始シ、中央貴賓席前ニ於テ文部大臣ニ對シ「頭右」ノ敬禮ヲ行ヒタル後所定ノ式場整列位置ニ整列スルモノトス

(式場整列位置及式場整列隊形ハ附圖第二號ノ如シ)

一一、式次第(十時開始)

- 1 開式
- 2 宮城遙拜(喇叭「君が代」吹奏)
- 3 君が代奉唱(二小節前奏後一同奉唱)
- 4 明治神宮遙拜(喇叭「國ノ鎮メ」吹奏)
- 5 靖國神社遙拜(同右)
- 6 宣戰ノ詔書奉讀(文部大臣)
- 7 祈念
- 8 內閣總理大臣訓辭
- 9 文部大臣訓辭
- 10 在學學徒代表壯行ノ辭
- 11 出陣學徒代表答辭

12 「海行かば」齊唱(二小節前奏後齊唱)

13 萬歲奉唱

14 閉式

一二、宮城遙拜ノタメノ行軍

出陣學徒部隊ハ式終了後直チニ宮城遙拜ノタメ行軍ニ移ルモノトス

其ノ要領左ノ如シ

1 式場出發ハ係員ノ合圖ニヨリ第一部隊(右翼時計臺側)及第二部隊(左翼日本青年館側)各右翼ヨリ同時ニ出發シ第一部隊ハ競技場北側門(時計臺下)ヲ經、第二部隊ハ競技場南側門ヲ經テ各隊毎ニ之ヲ續行スルモノトス

2 行進經路ハ左ノ如シ

第一部隊

外苑——信濃町驛前——鹽町——四谷見附——半藏門——一番町——竹橋——東京外語校前——內濠——宮城——日比谷公園

第二部隊

外苑——青山四丁目——赤坂見附——平河町——三宅坂——內濠——櫻田門——宮城——日比谷公園

3 行軍ハ四列縱隊トシ學校ノ距離ハ概ネ二十米トス

5 喇叭隊ハ各學校部隊ノ先頭ニ附スルモノトス

6 參列學徒ハ出陣學徒部隊ガ全員退場シ終ルマデ所定ノ位置ニ止マリ係員ノ合圖ニヨリ退場シ、行軍歸校スルモノトス

一三、宮城遙拜

二重橋前二至り隊列ヲ整へ各學校毎ニ之ヲ行フモノトス（附圖
第三號參照）

一四、解散

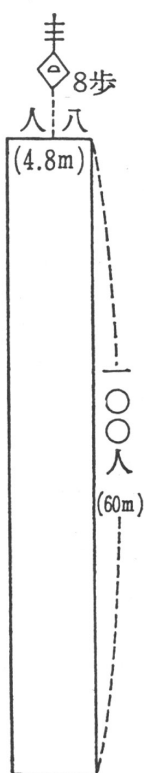
各學校部隊ハ宮城遙拜後日比谷公園廣場ニ至リ解散スルモノトス

一五、注意事項

- 1 各學校ハ學徒ノ健康狀況ヲ充分ニ注意シテ參加隊員ヲ選定スルコト
- 2 外套、寫眞機等ヲ携行セザルコト
- 3 會場ヨリ解散時マデ用便ノ機會少キニ付豫メ達シ置クコト
- 4 晝食ハ會場、退場後各學校毎ニ適宜ナスコト
- 5 救護班ハ各學校毎ニ必ズ隨行セシムルコト
- 6 防空警報發令又ハ荒天ノ場合ハ延期シ、其ノ期日ハ追テ通知ス

集合隊形（第一號）

一大隊 八〇〇人 距離間隔六〇糎



約三三大隊 距離三、二〇〇米
要圖

- 道路 ① 十一大隊
- 道路 ② 十五大隊
- 道路 ③ 六大隊

大隊番號ハ別紙編成表ニ依ル
集合隊形（第二號）（圖ハ次頁に掲載）

沸る滅敵の血潮

けふ出陣學徒壯行大會

二十一日朝、秋深む明治神宮外苑競技場、全日本の學徒が多年武技を練り、技を競つたこの聖域に、壯行の祭典、は世紀の感激をもつて舉行された……『文部省主催出陣學徒壯行會』その名は平凡である、だがこの朝外苑競技場に沸き上つた若人の感激は恐らくは當競技場の歴史始つて以來の高さと強さをもつて奔騰したのであつた、まこと國を擧げて敵を撃つ決戦の秋、大君に召されて戦ひの庭に出で征つ若人の力と意氣はこゝに結集し、送る國民の赤誠、またこゝに万斛の涙となつて奔つたのである

この朝午前八時、出陣學徒東京帝大以下都下、神奈川、千葉、埼玉縣下七十七校〇〇名は執銃、帶劍、卷脚絆の武裝も颯爽と神宮外苑の落葉を踏んで、それ〴〵所定の位置に集結、送る學徒百七校六万五千名は早くも觀覽席を埋めつくした

右翼にぎつしり詰つた學友、級友を送る學生生徒、先輩を送る中等學校生徒、左翼を埋める女子專門學校、女子中等學校生徒——六万五千の若い頬は花園の輝きに似る

九時二十分、戸山學校軍樂隊の指揮棒一閃、たちまち心も躍る觀兵式行進曲の音律が湧き上つて『分列に前へッ』の號令が高らかに響いた、大地を踏みしめる波の様な步調が聞える、このとき場内十

万の聲はひそと静まる、見よ、時計臺の下、あの白い清楚な帝大の校旗が秋風を仰いで現れた、續く劍光帽影『ワアツ』といふ喚聲出陣學徒部隊いまだ進む、『頭アー右ツ』眼が一齊に壇上の岡部文相を仰いだ、カーキー色の國民服に身をかためた文相の右手は石のやうに上つたまゝ動かない、幾十、幾百、幾千の足が進んで来る、

この足やがてジャングルを踏み、この脛やがて敵前渡河の水を走るので、拍手、拍手、歡聲、歡聲、十万の眼からみんな涙が流れた、涙を流しながら手を拍ち帽を振つた、女子學徒集團には眞白なハンケチの波が霞のやうに、花のやうに飛んでゐる、學徒部隊はいつしか場内に溢れ、劍光はすゝき原のやうに輝いた、十時十分、分列式は終る、津波の引いたあとのやうな静けさ、やがて喇叭『君が代』が高らかに響いて、宮城遙拜、君が代奉唱、ふたゝび喇叭は高らかに『國の鎮め』を吹奏して明治神宮、靖國神社の遙拜を終る、岡部文相、宣戰の詔書を奉讀、秋風が幾百の旗を鳴らしてゐる、祈念に次いで東條首相が壇上に登つた、力強い一言一句が場内の隅々に、出陣學徒の胸の隅隅にしみ渡つて行つた、續く岡部文相が讀みあげた饒けの一首『海ゆかむ山また空にゆかむとの若人のかどでををしくもあるか』

次いで參列學徒代表慶大醫學部學生奥井準二君の壯行の辭を述べれば、出陣學徒代表東大文學部江橋慎四郎君が元氣一杯壇上にのぼり『……いよく不撓不屈の闘魂を鍊磨し強靱なる體軀を堅持して決戦場裡に前進し、誓つて皇恩の萬一に酬い奉らん……』と答辭を述べる

やがて『海行かば』の大齊唱は秋空高く木魂し『天皇陛下萬歲』

の三唱に壯行の式典は終止符を打つた、時に十一時十分、次いで出陣學徒は二隊に分れてそれごとく校歌を高唱しつゝ市内行進に移り宮城前に一死報國を誓ひ奉つて午後一時解散した

〔朝日新聞〕昭和十八年十月二十一日夕刊

われぞ御楯 學徒總出陣の日

〔前略〕東條首相を中心に嶋田海相、岡部文相の三大臣が受禮臺に竝ぶ、三大臣を背に出陣學徒部隊に向つて在學學徒代表慶大醫學部學生奥井準二君が高らかに壯行の辭を述べ、これに答へて出陣學徒代表東京帝大文學部江橋慎四郎君が三大臣に向つて立ち、皇國を富岳の泰きに置かざるべからずと決意漲る答辭を朗讀、出陣學徒ばかりからなる五十二名の東京音樂學校吹奏報國隊の奏樂によつて前線に響けと『海ゆかば』を齊唱し、東條首相の發聲によつて

『天皇陛下萬歲』を奉唱し十時五十分、豪華壯烈な若人の武の祭典——出陣學徒壯行會を終了した、鳴り止まぬ感激の拍手と軍艦行進曲に送られて出陣學徒は二部隊に分れ母校の校歌も高らかに宮城前に行進感激の遙拜を終り日比谷公園廣場で解散した〔後略〕

〔毎日新聞〕昭和十八年十月二十一日夕刊 第一面

……やがて出陣學徒を含む東京音樂學校樂團の前奏で壯烈限らない『海ゆかば』の大合唱が湧き上る曲は神宮の杜を壓し去り、遠く遠く木靈を呼ぶ、あゝ今はじめて出陣學徒達の紅頬に流れる一筋一熱いものの濡らすがままに虚空をみつめつゝ歌ひ續ける彼等の面の何と氣高いことだらう……既に死生を超え悠久の大義に生きんことをの

みひたすら念ずる彼等である

(同 第二画)

勇む心こめて 音楽生の吹奏

出陣學徒の力強い壯行の辭が終つたあと式場は『海ゆかば』の厳肅な齊唱につままれた、すでに一身を捧げる覺悟の學徒の清く澄む聲をのせる吹奏、東京音楽學校の出陣學徒らが奏でる力籠めての吹奏である、これを限りに樂器を銃に持ちかへて戰の庭へと思へば出陣への勇む心が熱く籠つて歡ふ人々の耳へ強く響いたのであつた、指揮した本科二年秋谷納君は語る

『はじめの豫定では全部陸軍軍樂隊がやつて下さるのでしたが別れの樂器を奏でて共に征き、共に送りたいといふ氣持ちからは是非にと願ひして肝に銘ずる『海ゆかば』を吹奏させて頂きました、この忘れぬ感激を戰場での心として力一杯奮戦する覺悟であります』

(同 第二画)

(二) 陸軍軍樂隊への入隊

繰上げ卒業に次いで学生の徴兵猶予解除、そして昭和十八年秋には學徒出陣という事態を迎え、音楽の専門學校にも戦線の空氣が押し寄せていた昭和十九年、東京音楽學校の十四名の生徒が陸軍戸山學校に入學し軍樂隊生徒となった。この年、戸山學校は最後の軍樂隊生徒一二〇名を受け入れたが、そのうち十四名が東京音楽學校の在校生であり、彼らはいわば出陣學徒予備軍であつた。

学内にはこの件に関する資料は残されておらず、公文書などによつて

も確認には至らなかつたため、複数の卒業生に対する聞き取り調査、依頼原稿、既存の書物や文章によつてまとめた。

東京音楽學校の生徒が軍樂隊に入隊したいきさつを東京音楽學校関係者と戸山學校軍樂隊長双方の側からまとめると、おおよそ以下のような

まず東京音楽學校関係者によれば――

昭和十九年――團伊玖磨、芥川也寸志両者の回想によれば春頃――、校内に陸軍軍樂隊への入隊希望者を募る旨の揭示が學校長名で行われた。これは当時の在校生たちの記憶のほぼ一致するところであるが、残念ながら揭示の一字一句については正確を期するすべをもたない。したがつて揭示文の具体的内容については、後掲の齋藤、芥川、團による文章に委ねる。いずれにせよこの揭示により志願し合格した十四名が、十月一日、陸軍戸山學校軍樂隊に入隊。音楽學校生としての優遇や免除はいつさいなく、軍樂隊として八カ月間――本来は二年間であつたのが戦時下一年間となり、さらに当時は八カ月に短縮され短期集中教育が行われた――規定どおりの訓練を終えて翌年五月二十八日卒業、陸軍軍樂隊上等兵となつた。

次に戸山學校軍樂隊長によれば――

山口常光編著『陸軍軍樂隊史――吹奏樂物語り』には、大正十五年、戸山學校では軍樂隊の弦樂器の強化のため、ヴァイオリンを杉山長谷夫、平井保三両氏に委嘱し、その親切的な教授が弦樂の技術向上に大いに役立つたと記されており、戸山學校と東京音楽學校との交流はすでにあつたことがわかる。杉山長谷夫は大正四年三月にヴァイオリン専攻で研究科修了、昭和四年以降は管弦樂を教務嘱託され、また管弦樂部員としてヴァイオリンを弾いている。平井保三は大正九年三月にチェロ専攻で研究科修了、同年教務嘱託となり分教場兼務、昭和三年三月助教授となり管弦樂部ではチェロを弾いた(詳細は本書巻末の職員一覧および年表参照)。

山口常光は明治二十七年長崎県生まれ、陸軍戸山學校卒業後、軍樂隊